

父と共に～酪農の未来を支えるために～

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科 3年 宮田 寛央

「お前には酪農家を支える仕事に就いて欲しいな。」

私の家は酪農家ではありません。埼玉県にある普通のサラリーマンの家庭に育ちました。父は、全国各地の酪農家を飛び回り、家畜の薬を届ける仕事をしています。ただ治療薬を届けるだけでなく、行った先の牛の健康状態を診たり獣医の手伝いをしたりと、直接酪農家の方とも牛とも関わる、そんな重要な仕事をしています。

私は幼いころに何度か父の仕事場に連れて行ってもらい、牛舎を見学する機会がありました。もともと動物が好きだった私は、父の仕事についていくことがとても楽しみで、様々な地域の酪農家に一緒に薬を運んだり、その家の牛に触れて遊ぶことが大好きでした。そして何よりも、父が酪農家に対し、病気の改善策を指導したり、原因を説明したりしている姿を見ることが大好きでした。しかし酪農という仕事に対し、真剣に向き合うことはありませんでした。ただ、「牛が好き」という気持ちと、「働く父の姿がかっこいい」という気持ちだけは中学生になっても持ち続けていました。

実際に進路について真剣に考えなければならなくなった中学校三年生のある日、父からこんなことを言われたのです。

「お前には困っている酪農家の人たちを支える仕事に就いて欲しいな。」

「困っている酪農家を支える？」

酪農家の方々のために、日本中飛び回り、毎日働く父の姿はかっこいいと思っていたものの、自分が実際に酪農に関わる仕事に就くということは考えもしていませんでした。そもそも、酪農家の支えになる仕事とは一体何だろう……。そんな疑問を持ちましたが、変わらず続けていた「酪農が好き、牛が好き」という強い気持ち、その気持ちだけを信じて、私は自分自身の中で「酪農家を支える仕事」を見つけるために、北海道で学習することを決意。まずは酪農の基礎基本について学習したいと考え、私は埼玉県から遠く離れ、酪農王国北海道の農業高校に進学。現在は名寄産業高校酪農科学科で、酪農について学習しています。父も本州の中学校から北海道の高校に進学し、酪農を学んでいました。今は父と同じ、北海道で酪農を学習することで、酪農の大変な面、魅力、酪農を取り巻く厳しい現状も含め、真剣に酪農と向き合っています。

毎日の早朝当番実習や放課後実習、授業の中での牛舎管理など、一日中牛とともに学ぶ生活は、大変ですが、本当に充実しています。その中で、日々、牛はただかわいいだけの動物ではなく、あくまでも生計を立てるための経済動物であることを痛感します。分娩にも数多く立ち会い、命が生まれる瞬間も目の当たりにしましたが、病気や怪我により淘汰される

牛や息を引き取る瞬間も、多く経験してきました。父の仕事の重要性についても改めて実感することができました。私は、学校で実施している「農場公開」という自主活動に特に力を入れています。農場公開とは、学校の農場を市民や地域の子どもたちに公開し、動物に触れてもらったり、収穫体験をしてもらったり、酪農や農業について学習を深めてもらう行事です。私は、この日のために、子牛を調教し、子どもたちが触れることができるように人にならして、子供たちに子牛に触れてもらう「動物ふれあい体験」に力を入れています。動物に触れることができる機会の少ない子どもたちに命の温かさを伝え、酪農が好きになるきっかけになればという思いから、この企画を始めました。子どもたちが目を輝かせながら、子牛に抱きついたり、一緒に写真を撮ったりしている姿を見ると、私自身やって良かったという達成感と同時に、この体験が、酪農に興味を持つきっかけになってくれれば本当にうれしいと思います。

この行事の運営をきっかけに、私は一つの夢を持つようになりました。それは、農業の教員になり、酪農自営者の育成と酪農に関わる仕事に就く子どもたちを育成することです。

現在の酪農業を取り巻く状況は、高齢化と後継者不足が大きな課題と捉えています。しかし、農場公開で見た子どもたちの笑顔や牛に対する興味を大事に育て、守ることが、これから先ずっと酪農業が発展していくためには重要だと考えました。だからこそ、私は、その人材育成という観点から、酪農家を永久的に支える仕事に就きたいと考えています。

酪農業の一般社会の認識は、休みがない、仕事がきつい、汚いなどマイナスなイメージばかりです。大事な食料生産の場であることや、命を扱う尊い生産現場であることなどは、マイナスのイメージに払拭されてしまい、酪農家の子どもたちですら酪農業を選択しない現状が多くあります。しかし、特に私のように本州から北海道に酪農を学習しに来た生徒たちの多くは、将来北海道での酪農業を夢見ています。その夢の後押しができる、そんな未来の酪農業を支える農業の先生になりたいです。

また、農業の教員になり、地域の酪農家の方々と協力し、地域の酪農業が活性化するような手伝いもしていきたいと考えています。例えば、高齢の酪農家に放課後や土日にボランティアで出向く活動などをさせていき、地域の酪農家を支えていきたいです。これは父の夢でもあります。父は、様々な酪農家に菓を届けに行く中で、体調が悪かったり、体が不自由な状況でも、毎日休まず働いている姿を見ていたのです。父は自分の仕事の範疇を超えて、その酪農家の仕事を手伝うこともあると話してくれました。つまり、それだけ、日本の全国の酪農を取り巻く高齢化の問題は深刻であるということです。この問題を解決するために、私は、酪農を学習する機会ととらえ、高齢化が深刻な酪農家に手伝いに行けるよう、「高校生酪農ボランティア」の活動を実現させます。

大きな夢ではありますが、絶対に叶えたい目標です。このたくさんの夢の実現のために

私は、今後、4年生大学に進学し、教員免許を取得し、農業高校の教員として、子どもたちに酪農の魅力を伝え、自営者育成や理解者の育成に力を入れていきます。

今でも私は、父の背中を追いかけています。父が酪農家を助け、日本の酪農業を下支えしているように、私は「人材育成」という観点から、未来の日本の酪農業をさらに下から支えます。

昨年、私は「酪農の夢」コンクールの学校団体賞受賞の時に、インタビューをしていただきました。そのインタビュー動画をみた父が私に言ってくれた言葉が、今も印象に残っています。「おまえなら酪農家を支えるだけじゃなく、地域の酪農を変えられるかもしれない。全力でやってみろ。」

自分の夢を父に認めてもらい本当にうれしく思ったのと同時に、改めて「酪農を支える仕事」という父の言葉の大きさと難しさ、その責任を強く感じています。

牛に触れた瞬間に見せた、子どもたちのとびきりの笑顔。その笑顔を大事に守り、育てていくことが、日本の酪農を守り発展させることにつながると信じています。支える方法は違っても、父も私も、「酪農が好き」「酪農を守りたい」という想いは一緒です。父とともに、私は日本の酪農を支えていきます。必ず夢を叶えます。